

平成 28 年 4 月 22 日現在

機関番号：87108

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770290

研究課題名(和文)大宰府の軍備に関する考古学的研究

研究課題名(英文)Study about armaments in Dazaifu

研究代表者

小嶋 篤(KOJIMA, ATSHSHI)

福岡県立アジア文化交流センター・その他部局等・研究員

研究者番号：60564317

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：大宰府の軍備は、白村江の戦い(663年)を経た「大宰府都城の造営事業(7世紀後半～8世紀第1四半期)」で整えられ、兵器生産は筑紫大宰傘下の工房が主体的に担った。大宰府に備蓄された兵器は、7世紀後半に生産されたものを多量に含み、8世紀以降の兵器も含まれる。つまり、大宰府保有兵器は、「大宰府都城の造営事業」の過程で確保された兵器を中核として、奈良時代(8世紀)を通じて補修と補充により、長期間維持されたと結論できる。大宰府に備蓄された兵器は、平時においては大宰府常備軍により守衛され、戦時下では朝廷からの勅により戦時編成された軍団によって運用されたと考えられる。

研究成果の概要(英文)：Armaments in Dazaifu were arranged via a war in Hakusukinoe. Produced one is included in a weapon in Dazaifu much in the second half in the 7th century, and the after 8th century weapon is also included. The feature of the weapon in Dazaifu is in the point that an extended period maintained the 7th century weapon.

The weapon stored Dazaifu with was usually protected by military. It was used with an order of the government in case of a war.

研究分野：考古学

キーワード：大宰府 兵器 鉄 木炭

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 先行研究では、考古学と文献史学でそれぞれ、大宰府の兵器の実態解明が試みられており、とくに761年以降に諸国器杖制が西海道に導入されたという点においては、双方の研究成果は一致している。

(2) しかし、761年以前における大宰府保有兵器の実態や兵器生産能力は不明な状況にあった。

(3) 研究代表者である小嶋は、大宰府史跡の調査・研究の過程で、膨大な量の大宰府跡出土兵器を見出し、大宰府の軍備を個別具体的な資料から立論できるとの着想に至った。

### 2. 研究の目的

(1) 大宰府の軍備が、「いつ」「どのように」整えられ、「いかに」維持され、運用されていたのかを明らかにする。

(2) 大宝律令の施行直後の律令国家発足時に、大陸国家や南方世界の境界域で、どのような軍備を整えていたのかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 考古学的手法に基づいて兵器のライフサイクル(生産・補修・廃棄・再利用)を検討した。

(2) 大宰府の軍備の前提となる原料鉄の確保と消費状況を検討した。

(3) 大宰府が確実に保有した兵器を抽出し、その実態解明を図った。

### 4. 研究成果

#### (1) 原料鉄の確保と消費

7世紀後半における九州北部の製鉄工房では、箱形炉(類)と横口付炭窯・方形製炭土坑を基本組成とし、東北地方の製鉄工房(7世紀後半)と共通する。列島東西の国境域で類似した製鉄工房が同時期に組織的に操業される状況にある。本研究では、方形製炭土坑をはじめとする「非築窯製炭遺構」に注目することで、豊富な資料数に基づいて、国境域の製鉄工房の類似性を明らかにした。

その一方で、大宰府都城を含む筑前国西部では、他地域に比べて方形製炭土坑の比率が高く、大型幹材の燃料使用を避ける様相が見出された。その背景には、東北地方と異なり、「都市と山林の近接」という当地域の歴史的風土の存在がある。

これらを整理すると、7世紀後半の大宰府管内では、確実に原料鉄を確保できる状況にある。大宰府都城や西海道各国の官衙、古代山城群の造営に伴う鉄の消費が、製鉄技術・製炭技術の主要な拡散要因であったと判断できる。筑前国西部における非築窯製炭遺構の盛行は、当地域の鉄生産が都市建設・整備、

須恵器生産をはじめとした複合的な山林利用の中で実施されたことを裏付ける。

#### (2) 大宰府の兵器生産

大宰府による原料鉄確保と大宰府都城の造営の不可分性は、原料鉄の主要な消費遺跡となる大宰府政庁周辺官衙跡の律令的複合冶金工房(7世紀後半)の存在からも裏付けられる。本工房の遺構は8世紀以降の大宰府官衙と重複することもあり、全容は不明であるが、来木丘陵南端の巨大な竪穴建物SX4145(南北13.5m×東西7.5m)からは、その一端が垣間見える。また、7世紀第4四半期に官衙整備の過程で埋め立てられた自然流路SX2480・整地遺構SX1406下層等の部分的な下層遺構の掘り下げで検出された多量の冶金関連遺物(鉄滓・鋳型・炉壁等)や漆付着遺物は、その生産量の大きさを物語る。不丁地区官衙のみでも、漆の運搬容器である須恵器平瓶・壺(7世紀後半)が297点も出土しており、物資の大量集積が確認できる。

このような物資集積の一端は木簡でも認められ、付札木簡「久須評」の存在から、豊後国玖須郡からの物資輸送が文字史料で実証できる。加えて、『日本書紀』天武14年(685年)11月甲辰条記載の筑紫大宰への兵器素材(鉄一万斤、箭竹二千連)輸送記事から、朝廷を介した大宰府管外からの物資輸送も確認できる。筑紫大宰の下に輸送された兵器素材は、筑紫大宰の要請に応じて、大宰府政庁周辺官衙跡を核とする傘下の律令的複合冶金工房で兵器に加工されたと考えられる。

以上をまとめると、大宰府の兵器生産は、白村江の戦い(663年)を経た「大宰府都城の造営期間(7世紀後半~8世紀第1四半期)」に重要な画期があり、両者が不可分の関係で実施されていたと結論できる。

#### (3) 大宰府保有兵器の実態

大宰府保有兵器は、大宰府管外から輸送された兵器と大宰府管内で確保された兵器の二者を内包する。

大宰府管外から輸送された兵器は、文字史料で確認できるものはすべて弓(梓弓)で、『続日本紀』大宝2年(701年)~霊龜2年(716年)にかけて500~5,374張が輸送されている。大宰府政庁周辺官衙跡出土被熱遺物は、有機質素材の焼失という資料的制約があるため、弓の遺存数は少ない。しかし、弓金具の一つである両頭金具が数多く出土することから、大宰府政庁の隣接地に弓が備蓄されていたことが考古資料から実証できる。

同様に弓と対になる矢(鉄鏃)も、大宰府政庁周辺官衙跡出土被熱遺物に大量に含まれることから、大宰府での備蓄が認められる。鉄鏃は基本的に同一部位で複数個体が溶着しており、最大で約90個体もの溶着が確認できる。有機質素材となる矢柄も焼失を免れたものがわずかに確認でき、複数個体が軸を揃えた状態で遺存している。つまり、大宰府

政庁周辺官衙跡出土被熱遺物は、保管形態のまま高熱を受けており、まさしく「兵器の備蓄」に相応しい遺存状態となる。

また、希少武具となる鉄製小札甲も、大宰府での備蓄が確認できる。鉄製小札甲は7~8世紀の新旧型式の小札が混在しており、製造時期が異なる鉄製小札甲が集積する状況にある。とくに札幅1.0~1.3cmの小札な、「奈良東大寺金堂須弥壇内埋納品(749~760年)」に類するものであり、大宰府保有兵器に往時の高級武具が含まれる点は重要である。

以上の大宰府保有兵器のうち、備蓄兵器の主体となるのは弓矢であり、とくに集団戦闘時の消耗品となる矢(鉄鏃)の備蓄が公的に図られていたと判断できる。被熱時期は上限時期が8世紀後半で、下限時期が10世紀と細かな時期特定は今後の課題であるが、現状で「兵器の長期間の備蓄」は認められる。

#### (4) 矢(鉄鏃)の備蓄と組成

矢(鉄鏃)の長期間の備蓄は、大宰府都城の南方に位置する小郡官衙遺跡でも確認できる。小郡官衙遺跡では、約300点にもおよぶ鉄鏃がBE地区溝815埋土(8世紀後半)から出土した。本遺跡出土鉄鏃は個体ごとに分類されて保管されているが、別個体との錆着状況が確認できる個体は、すべて同一部位で錆着しており、保管形態を保ったまま埋没したと想定できる。

大宰府政庁周辺官衙跡出土被熱鉄鏃と小郡官衙遺跡出土鉄鏃は、尖根系鉄鏃を主体として、わずかに平根系鉄鏃が加わる。尖根系鉄鏃の刃部形式の組成は、「鑿箭式：片刃箭式：三角形式=6：2：1」で、片刃箭式長頸鏃が主要組成の一翼を担う。籬被形態は「棘籬被：闊籬被=9：1」で、棘籬被が圧倒的に多い。

このような鉄鏃組成は、圭頭式鏃を含む西海道内の在来の鉄鏃組成と一線を画しており、むしろ類似した鉄鏃組成は奈良東大寺正倉院で認められる。奈良東大寺正倉院に現存する鉄鏃は、尖根系長頸鏃(鑿箭式2,472点、片刃箭式759点、三角形式96点)を主体とし、平根系鉄鏃(方頭式187点、三角形式26点、飛燕式2点)が加わる。これらの鉄鏃群には棘籬被形態のものや「下毛野奈須評」銘が認められ、7世紀後半に製作されたものが含まれている。

大宰府政庁周辺官衙跡出土被熱鉄鏃と小郡官衙遺跡出土鉄鏃も、奈良東大寺正倉院と同様に飛鳥時代(7世紀後半)の製品を多量に含むと考えられ、鉄鏃とともに被熱した両頭金具・小札甲の存在もこれを傍証する。

#### (5) 大宰府の軍備

(1)~(4)の成果を統合すると、大宰府の軍備は、白村江の戦い(663年)を経た「大宰府都城の造営事業(7世紀後半~8世紀第1四半期)」で整えられ、兵器生産は筑紫大宰傘下の律令的複合金工房が担った。つま

り、当該期の大宰府の兵器生産は、「大宰府都城の造営事業」の一翼として実施されたと考えられる。本事業には物資の大量消費が伴っており、兵器素材は大宰府管内だけでなく、朝廷を介した大宰府管外からの輸送でも補充された。

大宰府に備蓄された兵器は、弓矢を主体とし、兵器素材と同様に大宰府管外から輸送された兵器と大宰府管内で確保された兵器の二者を内包する。備蓄兵器は7世紀後半に生産されたものを多量に含み、8世紀以降の兵器も含まれる状況にあった。つまり、大宰府保有兵器は、「大宰府都城の造営事業」の過程で確保された兵器を中核として、奈良時代(8世紀)を通じて補修と補充により、長期間維持されたと結論できる。761年以降に実施された諸国器杖制も、大宰府管内に備蓄された兵器の数量的維持として機能したと見られる。そして、大宰府に備蓄された兵器は、平時においては大宰府常備軍により守衛され、戦時下では朝廷からの勅により戦時編成された軍団によって運用されたと考えられる。

#### (5) 本研究の意義

大宰府の軍備は、これまで古代山城の研究から立論されてきたが、(1)~(5)の研究成果により、「兵器」・「兵器生産」からも立論することが可能となった。大宰府の軍備は、九州北部の国境化と直結する問題であり、その実像を明らかにした本研究により、国家形成史に新たな研究素材を提供することができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### [雑誌論文](計5件)

小嶋篤、九州北部の木炭生産、福岡大学考古学論集、査読無、2集、2013、375-406

小嶋篤、小郡官衙遺跡出土鉄鏃の研究、九州歴史資料館研究論集、査読有、39号、2014、35-54

小嶋篤、大宰府保有兵器の蓄積過程、査読無、古代武器研究、vol.10、2014、67-89

小嶋篤、皆見大塚古墳出土鉄鏃の研究、東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告、査読無、17集、2015、88-92

小嶋篤、九州北部の鉄生産、田中良之教授追悼論文集、査読無、2016

#### [学会発表](計5件)

小嶋篤、山岳霊場と山林利用の考古学的研究、第3回九州山岳霊場遺跡研究会、2013年8月18日、レスポアール久山

小嶋篤、大宰府の兵器、第10回古代武器研究会、2013年3月1-2日、山口大学

小嶋篤、大宰府成立前後の冶金工房、七隈史学会第16回大会、2013年9月27-28日、

福岡大学

小嶋篤、古代兵器から迫る！、大城（大野城）の謎に迫る！、2016年2月13 - 14日、九州国立博物館

小嶋篤、兵器の様相から見た古代山城、築城技術と遺物から見た古代山城、2016年2月27日、熊本県教育委員会

〔図書〕(計1件)

小嶋篤、九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター、大宰府の軍備に関する考古学的研究、2016、135

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小嶋 篤 (KOJIMA, Atsushi)

福岡県立アジア文化交流センター・研究員

研究者番号：60564317